



脳卒中の予防と治療に全力を尽くす、 志太地域の“脳の後見人”

2013年11月取材

静岡県焼津市
医療法人社団 志太記念脳神経外科 院長
豊山 弘之 先生

研修医時代の最初の研修先が脳神経外科でした。志太記念脳神経外科の豊山弘之先生は「生まれたばかりのヒヨコが最初に見たものを母親と認識するのと同じ感覚です」と振り返ります。以来、一貫して脳卒中の予防と治療に尽力し、2005年に開業してからは、志太地域に住む人たちの脳の健康を守り続けています。

脳卒中治療の原点は予防にあり

「地域から脳卒中を減らすことがライフワークです」と豊山先生は言います。脳卒中、すなわち脳梗塞や脳出血は、ひとたび発作が起これば生命を脅かすことはもちろん、治療後に後遺症が残るケースも少なくありません。「脳卒中は発症自体を防ぐことが重要。治療の原点は予防です」と強調します。

発作につながりかねない病変を早期に発見するために行うのが、MRIによる脳検診です。無症候性脳梗塞や未破裂動脈瘤などが確認できた場合は、問診を通して悪化させる因子の有無を探ります。「高血圧、糖尿病、心房細動、喫煙など脳卒中の危険因子は多様ですが、個々に適切なアプローチを行えば、確実に発症リスクは低下します」。同院では、高血圧や糖尿病であれば生活改善や薬物療法、心房細動であれば抗凝固療法などの治療を、「患者さんのライフスタイルに合わせて」行っています。



豊山先生は、志太地域での自らの役割について、「脳卒中の治療と予防、そこに徹する。歩いて帰れる患者さんを少しでも増やしたい」と語ります。

共通認識に基づく、流れるような手術



手術室。患者さんの手足が動ける状態にあるかをリアルタイムで確認できる運動誘発電位(MEP)モニター、微細血管の血流を映し出す顕微鏡下術中ICG蛍光血管撮影装置など、最新鋭の機器が導入されています。

多くの症例、患者さんと向き合い、医師としての知識や経験が大きく上積みされても、「やりたいこと、やるべきことは研修医の頃から何一つ変わっていません」と話す豊山先生。開業した現在も、脳動脈瘤の破裂予防を目的とするクリッピング術、コイル塞栓術を中心に、年間約120例の手術を行っています。

脳の手術は、術後の合併症防止の観点から、極力シンプルに行うことが求められます。その点を問うと、「当院は脳神経外科に特化した病院です」と先生。これは、医師・スタッフともに同種の症例を多く手掛けていることを意味します。それだけに経験やチームワークに優れ、「全員が手術のプロセスとポイントを細部まで熟知しているので、声をかけなくても、よどみなく流れていきます」と手術時の様子を語ってくれました。

全ては与えられたもの。常に謙虚さを

患者さんへのやさしさ、いたわり、質の高さを持つ——豊山先生とスタッフが共有する同院の理念です。先生は、脳神経関連の全ての学会に参加し最新の情報を収集、あるいは手術や検査体制を充実させるために新棟を建設するなど、常に質の向上に努めています。

開業当時、1日の患者数は数名でした。現在は100名を超える日もあるそうです。受診者が増えた背景について、先生の考えを尋ねると、「運がいいだけです。この地域の方々には本当に人がいい。地主の方は開業場所を、患者さんは診療機会を与えてくれました」と感謝の言葉を口にし、こう付け加えました。「“与えてもらっている”という意識を持ち続けています」。このような謙虚な姿勢を大切にしているからこそ、常に「患者さんの期待を裏切れない」という思いが胸の内に宿り、それが理念に基づいた医療を実践する原動力、ひいては患者さんとの信頼関係の醸成につながっているといえそうです。



「スタッフは資格取得をめざすなど、スキルアップに意欲的に取り組み、多忙を極めても笑顔を保つことはありません」と豊山先生。理念を体現するスタッフの姿は、先生の目に非常に心強く映っているようです。